

## ホロコースト後の死（その一）——ヴォイドフスキの自死が語りかけるもの——

小原 雅俊

「沈黙を破る必要があり、第一回ショーアー世代作家会議を召集し、開会を宣する必要がある。第二次世界大戦の勃発以来半世紀が過ぎたが全世界のユダヤ文化、ディアスポラの社会、そして文明的な形のユダヤ教は、当時被った損害を今日に至るまで感じている。それに反して、イスラエルにおいても他の離散の国々においても、哲学思想と芸術の貴重な作品が生まれ、民族の悲劇の重圧のもと、不滅の価値を持った編年史や回想録が書かれたが、それは我々のあとに続く世代にホロコーストの時代についての苛酷な真実を伝えるであろう。この人間の意志の行為と生き残りの証言は、ユダヤ教との戦争という野蛮な教義が今一度敗北を喫したことを証しているが、たとえその予兆であれ、地平線に新たな脅威の幻影が現れている間は、我々は労を厭うわけにはいかない。我々は意識的に組織された行動の段階に入らなければならない。なぜなら時の経過と多くの古い世代の証人の他界、そして今現在の出来事の殺到が忘却の不安を内に宿しているからである。ショーアーは普通の文学的テーマではない。それは激しい痛みであり、悲痛な体験への氣遣いであり、それについての記憶であり、それは普遍的次元での辱められた人間性のドラマであり、地球上の人間の存在

の問題性についての問いであり、最後の世代の——戦争が終わったあととすぐ不器用な手つきで自らの生存についての報告を書き付けたユダヤ人の子供から、プロの熟慮でもってメシア的絶滅に直面した人間の心象を書き留めた円熟した作家に至るまでの——すべての物書きがそのことを理解していることを私は疑わない。

この半世紀の間、我々は自らの責任で、また不安定な文学状況や移り変わる流行を気に止めずに個人的、内面的な創造的義務に則って仕事をしてきた。命令した者はなかったし、指揮を執った者もなく、悲劇的なユダヤ教の声のみが言葉の形態を取って現出したのであった。我々、さまざまな言語の年代誌作者や詩人、小説家たちがひとつの場所であつたためにそれぞれ別の道を辿ったのであった。そして、もはやこれ以上国際的なショーアーの作家たちの集まりを先に延ばしてはならない時がやってきたのである。たとえばぐずぐずしていたとしてもどのみち、このような会議の必要が我々の後継者たちにとって当然の課題であることが明らかにする時が来ると私は強く確信している。遅延は我々の大義にとって有害であり、証人が少なくなっていく、ホロコーストの参加者と犠牲者が減っていく、全人間的・創造的体験を有するかけがえのない作家たちが

減っていくのである。それは、我々の共通の懸念の対象となるべきである」

ボグダン・ヴォイドフスキ「ジョーア世代の作家たちへの公開状」（一九九一年）<sup>1</sup>

はじめに

ここに引用したのは、一九九四年四月一九日自殺して世を去ったポーランドのユダヤ系作家ボグダン・ヴォイドフスキが、その死の二年余り前の一九九一年秋、民主的で自由な東欧世界への歴史的転換の雰囲気の中で、自ら設立した「マサダ文化財団」が発行した創刊号にして最終号となった季刊誌『マサダ<sup>2</sup>』にヴォイドフスキ自身が執筆した二つの論文のうちのひとつ「ジョーア世代の作家たちへの公開状<sup>3</sup>」の一部である。ボグダン・ヴォイドフスキは一九三〇年、ワルシャワ生まれのポーランド語で書いたユダヤ系作家である。最初の、戦前の名前はダヴィッド（David）、ボグダンは占領時代に付けられたものを残した名前である。一九四〇年一月一日から一九四二年八月まで、家族とともに閉ざされたワルシャワ・ゲットーの中のクロフマルナ通り四二番地に住んだ。四二年、ゲットーを脱出し、ヘアリア人側以身を隠して生き延びる。ゲットーを出て以来、ヴォイドフスキは「二度と家族と会うことはなかった」<sup>4</sup>。

戦後、ポーランドに留まり、さまざまな新聞や雑誌にルポルタージュや書評、文芸批評、演劇批評を、また四六年頃から書き貯めていた短編小説を発表していった。五七年に、出版社で、最初の短編集『ヨブの休暇』の組版が完成するが、検閲の決定で出版に至らず、ようやく一九六二年に五年間の差し押さえの後、陽の目を見る<sup>5</sup>。同じ年、ヴ

ォイドフスキの最大の作品となる『死者に投げられたパン<sup>6</sup>』の断章（単行本としての出版は一九七一年）が初めて雑誌『現代』に掲載され<sup>7</sup>、『ヨブの休暇』ともども批評界の注目を集める。

以後、ヴォイドフスキはその自死に至るまで、主としてユダヤ人の問題をテーマとした作品を発表し続けるのである。

本論はこのボグダン・ヴォイドフスキの、おそらく実現することのなかったワルシャワでの「第一回ジョーア世代作家会議」開催を呼びかける過激で、絶望的なアピールと『死者に投げられたパン』及びそのほかのこの作家が残した独特の文学を紹介しつつ、ホロコーストの文学及びホロコースト後の文学のありよう、とりわけ、ホロコーストの舞台となったポーランドにおけるこの文学が投げかける問題を検討する試みである。

## （一）

かつて詩人長田弘はワルシャワ・ゲットーの生活の悲惨を鮮やかに描きだしたボグダン・ヴォイドフスキの長編小説『死者に投げられたパン』の見事な批評の中でこう述べた。「実際のゲットーの少年としてそだった作家が、この『死者に投げられたパン』のなかに書ききっているのは、そのかけがえのない記憶だろう。波うつような記憶の細部が、物語をしっかりとらえている<sup>8</sup>。」と。詩人はさらに、「もしブリューゲルの目でワルシャワ・ゲットーの日々を書いたなら、きっとこのような本となる。そんなふうに感じられる物語である」と述べた後、「ワルシャワ・ゲットーのユダヤ人は四三年、絶望的な蜂起のうちにナチス・ドイツによって壊滅させられた。この物語はその蜂起の

直前で終わっている。この塀の内がわの物語に、塀の外がわのワルシヤワを書いたイエジ・アンジェイエフスキの佳作『聖週間<sup>9</sup>』をあわせて読むならば、ポーランドの現代文学がどんな「戦後」を負ってきたかが、いつそうよく理解できるだろう<sup>10</sup>と付け加えたのであった。

詩人の想像力は、煉瓦塀で閉ざされたワルシヤワ・ゲットーの中で作者ヴォイドフスキと彼の同胞たちが体験した一九四〇年秋から一九四二年までの「人間世界全体の——歴史と現在の——絶滅<sup>11</sup>」（ピョートル・マティヴィエツキ）をしっかりとらえているだけでなく、「戦後」のポーランド文学の、そして「絶滅」後のポーランドのユダヤ人の生が負わねばならなかった問題をも見据えているかのようである。

ヴォイドフスキの自死の四年後になる一九九八年、まだ創刊されたばかりのポーランド・ユダヤ人の月刊誌『ミドラシュ<sup>12</sup>』は四月号で「ゲットーと『マサダ』の間のヴォイドフスキ」というこの作家についての特集を組んだ。ヴォイドフスキについての特集が組まれるのは初めてのことであった。その中で、すでに引用した「あらゆる鉄条網の刺に逆らって」と題された巻頭論文を『マサダ』の編集協力者のひとりだったピョートル・マティヴィエツキは、ヴォイドフスキの死後に出た追悼文を分析しつつ、戦後ポーランド文学の中で極めて特異な位置を占めていたこの作家の突然の自死に直面してとまどう人々の様子を紹介することから書き出している<sup>13</sup>。

例えば「マサダの防衛者たちは集団自殺を遂げた。ボグダン・ヴォイドフスキは四月、マサダ陥落の記念の日に突如、世を去った」といった、ワルシヤワ・ゲットー蜂起の指導者たちの集団自決<sup>14</sup>について言われるのと同じ歴史的類比を用いたものもあったようである。

ヴォイドフスキの死は、雑誌『マサダ』創刊から三年も経たぬ一九

九四年四月一九日のことであつたし、この雑誌自体がヤン・ラドジツキの「マサダの防衛」という記事を掲載し、フラヴィウス・ヨセフスの『ユダヤ戦争』の記述と考古学の発掘をもとに、要塞の防衛者たちの集団自決の事実の信憑性、その意味について考察している<sup>15</sup>だけに、こうした類比で語られるのも不思議ではないのかもしれない<sup>16</sup>。しかも、マティヴィエツキによれば、後期の——つまりはポーランドの「全体主義」制度からの脱却の時期以降の——ヴォイドフスキはこの季刊誌『マサダ』の編集・発行に全情熱を傾けていたのである。

おそらくこのマティヴィエツキは、自らそのメンバーに加わったというよりは、ヴォイドフスキ自身が自らの周囲に集めた協力者仲間のひとりであつたろう。ちょうど本論の筆者も、ヴォイドフスキの一九八七年刊行の、生前では最後の作品集となつた『歪んだ道<sup>17</sup>』に収められた『老ドクター』の訳出<sup>18</sup>の件で一九九〇年をはじめから何度か著者と連絡を取っていたが、その翌年ヴォイドフスキから送られてきた『マサダ』の協力者の中に自分の名前を見出して仰天したことがあるためである。マティヴィエツキによれば、当時、協力者や友人たちはヴォイドフスキが付けた『マサダ』という誌名に反対だった。パセティツクで自暴自棄なニュアンスを読み取ったからである。しかし、と彼は付け加える。「つい最近私は、一九七〇年に自殺した『絶滅』を生き残ったユダヤ人、パウル・ツェランの詩を読んだ。

考えてもみたまえ／マサダの泥まみれの兵士が／祖国を学び取ったのだ／決して拭い去りようのないほど／あらゆる鉄条網の刺に／逆らつて／（……）／考えてもみたまえ／そして／私のもとにやってきたのだ／名前に敏感なものが、手に敏感なものが／永遠に／葬ることのできない人のところから<sup>19</sup>。

ショアー世代のマサダは単なる英雄的な自殺者たちのシンボルではない。それは人間世界の総体を守ることばと行為の用心深さの中の死者の復活、自分自身の死を代償にした復活のシンボルである」。そしてマティヴィエツキは、ヴォイドフスキはこのショアー世代作家会議を「無関心な土地に葬られるのを『よしとしなかった』人々に代わって呼びかけた」<sup>20</sup>のだ、と述べるのである。『マサダ』の協力者たちは、あたかも、プリモ・レヴィイ<sup>21</sup>やパウル・ツェラン<sup>22</sup>、そしてアメリカに亡命して世界的作家となったポーランド出身のユダヤ系作家、イエルジー・コジンスキー（ポーランド語名、イエジ・コシンスキ<sup>23</sup>）が辿ったと同じような自死への予感の中でヴォイドフスキを支えていたようである。マティヴィエツキはさらに書いている。「われわれ（協力者）は偉大な作家が引き受けた使命に奉仕しているのだということを自覚していた。それはユダヤ人に関する事柄を、中・東欧のアイデンティティを回復しつつある、生まれ変わろうとしているポーランドのアクチュアルな問題にする、という使命であった。なぜならこの事柄はあらゆる変化を遂げた文明状況の中で、とりわけ自由と民主主義が戻った状況の中で再び取り上げられなければならないからだ。ボグダンの気難しい性格や進行しつつある精神の病いの徴候（几帳面さ、被害妄想と隣り合わせの不自信）もわれわれに嫌気を起こさせることはなかった——重要なのはこの使命であった。時代の信ずべき証人、ヴォイドフスキがそれを引き受けたのであり、そのことが使命に威厳と確証の可能性を与え、チャンスを作り出していたのである。なぜなら、彼の哲学的知識と人文科学の教養がユダヤ人の問題を深い現代性の中心に置くことを可能にしていたからである<sup>24</sup>」と。

「広義のユダヤ文化の問題のための発言の場<sup>25</sup>」として構想された季刊

誌『マサダ』の発刊、そこへの二つのエッセイの執筆<sup>26</sup>、そして一九九〇年に書かれながら、ようやく一九九三年になって雑誌『ブルス（鼓動）』の五・六月号に掲載された、アリナ・モリサクによればヴォイドフスキの最も優れたエッセイである「運命としてのユダヤ教<sup>27</sup>」の執筆は、八〇年代はじめてから作家の死まで続いたきわめて活発な創作活動を証していると同時に、この時期がヴォイドフスキの考え方の過激化の時期でもあることを示している。ヴォイドフスキは「死者に投げられたパン」以来のユダヤ人テーマにほとんど全面的に集中することになる。

彼にとつて最も重要な問題であったのはポーランド・ユダヤ人の運命であった。モリサクはその死後に出版されたヴォイドフスキの最後の本である『向こう側<sup>28</sup>』についてこう書いている。「最後の本の中の人々がどんなに独特であるか強調する価値がある。その一人一人が『烙印を押されて』いるのだ——ヴォイドフスキのユダヤ人の主人公たちを結び付けているのは、全員が全くの別世界に置かれることになったが、ショアー体験の状況から決して自由になれないということである」。

「運命としてのユダヤ教」の中では、「ディアスポラの数百年の間に成し遂げられたユダヤ人からの“相続権剥奪”のステップを指摘し」

「また、今日おそらく最も重要な——ユダヤ人であるとはどういうことか——という問いを投げかけた。しかもそこで彼は流行のアイデンティティーの問題を議論しようとするのではなく、今日、世紀の終わりに、このような問いが人々にとってどんな意味があるのかと終始考え込むのである。実存的個人の状況に関するものではなく、ありのままの存在の意味にたどり着こうとする問いが」と<sup>29</sup>。ヴォイドフスキはこの記事を雑誌に掲載するまでに随分苦労したようである。しかし、モリサクはこれほどの力強さを持った文章が当然あって然るべき議論

を巻き起こさなかった、なぜであろうか、と問いかけている。

ここには、ユダヤ人について語ることが戦後の社会主義の中ではタブーであったこと、「連帯」運動以降の転換期によりやくタブーを解かれたユダヤ人とポーランド人の関係の問題への関心がポーランドで急速に高まるなか<sup>30</sup>、しかし同時に、自らの全存在を賭けた「対峙」がなお一層「嘘とグロテスク」を増しつつあることを証しているかに思えるポーランド社会の反応の中で、のちに『プルス』誌に発表した論文のタイトルを借りれば、ヴォイドフスキもまた、いわば「運命としてのユダヤ教」に回帰していったことが分かる。

この作家の自死に対して、ポーランドのジャーナリズムが示した我々の周囲の日常の死に対してよりもはるかに大きな困惑にも見られたように、ヴォイドフスキのポーランド文学の中の存在の意味とその作品を通して問いつけた問題が、ポーランド社会にとって、なおも「居心地の悪い」、異質なものであることを物語っているであろう。

ヴォイドフスキは第二次世界大戦中のナチス・ドイツによつて閉ざされたワルシャワ・ゲットーを生き延びて、「塙の内がわの日々を生きて死んでいった人びとへの鎮魂歌を、一人の若い少年をめぐる暮らしの輪とおして、濃密にえがきだした物語<sup>31</sup>」を書いただけでなく、その後も死に至るまで、ポーランドに留まった数少ないポーランド・ユダヤ人として、おそらくはただひとり、ホロコースト後のユダヤ人作家の役割を担い続けてきた作家でもあるからだ。「ゲットーと死の収容所の後のすべてのユダヤ人と同じように」「決着を付けるべき世界との困難で、特殊な問題を抱えており」「数度にわたつて作品の中でその解決を試みた」<sup>32</sup>ヴォイドフスキの作品が広く世間に受け入れられないのは当然であつたかもしれない。

モリサクはこの作家の最後の時期、彼の中で「現実に対する直接的反応としての作品に関して、思想の過激な先鋭化が生じた」として、最も重大だと判明したのは、「時の経過が忘却の不安をもたらす」という意識であり、新たな反ユダヤ主義を経験する危険であつた、と結論づけている。ヴォイドフスキの作家としての存在基盤は「ショーア世代の作家」に属していることであつた。モリサクは一九九〇年九月二九日、第三ポーランド・ラジオ放送がヴォイドフスキの作品を取り上げたグロンチエフスカとの対談でのヴォイドフスキの発言を書き留めている。「私は非人間的な世界を作り出してはいません。それは私が叙述を始めたとき存在しており、わたしがやる必要があつたのは目にすることから結論を引き出すことだけでした」。

マティヴィエツキもまた、ヴォイドフスキがその文学的、思想的過激さでもって、ホロコースト後の自分自身とユダヤ人の運命を、そしてポーランドと世界を鋭く、はつきりと見据えた重い作品のみを発表し続けた作家であるとする。マティヴィエツキはこう回想している。

「ボグダン・ヴォイドフスキの作家、思想家としての過激さ（しかもそれは彼の作品の中にだけでなく、人間そのものの中に感じられたものだ）はこんな風に理解できるだろう。彼にとつて生は常に総体的なものであつたし、一瞬ごとの今と対峙しつつ、生が総体的なものであることを、そしてまた常に対峙のうちにあることを明らかにしてきたのであつた。生は彼にとつて不意で、突然で、極限にまで押し進められたものであつた。その自明の無力さの限界を、『絶滅』のあと不可能になつた『存在そのもの』の限界を世界に向かって示してきたのだ<sup>33</sup>」と。しかも、「今世紀、特にその後半は、『絶滅』のあと、すべてのユダヤ人の個人的な問題が悲痛で、居心地の悪い問いのうちに

提示されており」、今日では、ユダヤ人の問題は、その回答が過激であるように設定されている、とマティヴィエツキは言う。「ヒューマニスティックな回答は、反ユダヤ主義的な回答を破壊することが出来ない以上、偽善の目＝疑念を免れることが出来ない。反ユダヤ主義的な回答はその犯罪性を露呈せざるを得ない。このような居心地の悪い問いが生じさせた過激さは、ユダヤ人の問題について考える時の知的な規範となった」<sup>34</sup>のである。「ユダヤ人には彼の人間性がヒューマニズムと名づけられ得るまえに、自らに対する敵意をニヒリズムと認識し得る前に、人間性が拒絶されてきたのだった」。従って、「名称の支配者である作家が『絶滅』の作家であるとき、それを他の人々に提示することの困難さについての英雄的かつ無力な知識とともに自らの問題を展開するのである」からには、それに価値判断を下す可能性を語ることができようか<sup>35</sup>。マティヴィエツキによれば、それでもなおヴォイドフスキは、ユダヤ人の問題を、つまりは自らの問題を提示し、判断を下してきたのだった。

ヴォイドフスキは『死者に投げられたパン』への「作者から」の中ですでに、ホロコーストの作家としての自分の役割について「もしも、永続することのない文字を刻みつける文学を正当化する何かがあるとしたら、それは人間の運命の移り易さである。いつの日か証言が（もしくは私の場合のように証言の一片が）もたらされんがために、偶然によって結ばれた多くの人びとが列をなしている。この列にあつて、わたしたちが分かちあう役割は、今日、作家の役割がわずかなものであり単純なものである以上、じつにささやかである<sup>36</sup>」と述べている。

長田弘もまたその短いが、凝縮した書評を「『死者に投げられたパン』の作家の声は低い。低いが確かだ。作家は未知の読者にこう語っ

ている」とした後、先の作家の役割についての言葉を引き、それに続く「それは、『するどく、はつきりとこの世界をみること』だ<sup>37</sup>」という言葉で締め括っている。ヴォイドフスキが「はつきりと見た」ものから生み出された作品は特異なものであり、それは「証言」の力をもっていた。運命の例外性がそれを可能にしたことは疑いない。しかし「ショアーは普通の文学的テーマではない。それは激しい痛みであり、悲痛な体験への気遣いであり、それについての記憶であり、それは普遍的次元での辱められた人間性のドラマであり、地球上の人間の存在の問題性についての問いであり、最後の世代の——戦争が終わったあとすぐ不器用な手つきで自らの生存についての報告を書き付けたユダヤ人の子供から、プロの熟慮でもってメシア的絶滅に直面した人間の心象を書き留めた円熟した作家に至るまでの——すべての物書きがそのことを理解していることを私は疑わない<sup>38</sup>」とヴォイドフスキが言うとき、彼の例外的な運命を「『絶滅』で殺されたすべての人々の問題だと信じさせようとする人の証言を一体誰が不愉快にならずに受け入れるだろうか」<sup>39</sup>とマティヴィエツキは問いかける。

そして、あるいは長田弘も洞察していたかに思われるポーランドの現代文学が負ってきた「戦後」の問題、『公開状』の中に書き付けられた「たとえその予兆であれ、地平線に」現れている「新たな脅威」——この論文の主調をなし、ヴォイドフスキの過激さをさらに促すことになった現代ポーランドにおける反ユダヤ主義の脅威がそこに加わる。モリスは六〇年代には二つの系統が並行して見られたヴォイドフスキの創作活動が「絶滅」のテーマに集中していった内面的変化の重要なコンテキストには、ヘンリック・グルインベルクがヴォイドフスキの思い出——「我々の戦争は一九四五年には終わらなかった。我々

はなおも戦い、屈服せず、抵抗しなければならないのだ。一方、我々の生ははるかに困難なものとなり、我々の力のはるかに早く尽きてしまう。我々が決して終わることのない圧倒的に不利な戦争の中で倒れ、屈服するのは何の不思議もない。絶えず暗闇の中から我々の潜在的殺人者が身を乗り出し、我々のもとから決して去ることのなかった脅威の状態が絶えず高まっている。彼はワルシャワで一九六八年をどのように耐え抜いたのだろうか。私だったら、耐えられなかったろう<sup>40</sup>——の中の「一九六八年」にそのクライマックスを迎えた六〇年代のポーランドにおける反ユダヤ主義があつたと指摘している。「それ以来、もっぱらユダヤ人の運命に向けられた作家の関心の集中が始まり、二つの基本的な問い——第二次世界大戦の帰結が刻印された人間の実存とユダヤ人の共通性から生き残った者の特殊な存在論的状況への問い——が思索の中で結合するプロセスが続くのである」。ヴォイドフスキは一九八〇年に出版された短編集『マニユシ・バヌイ』の最初の梗概が生まれたのは、六〇年代末、「大声で、騒々しく私のような者に対してポーランド性への権利が拒絶されていた時のことだった」と日記（一九八二年四月一三日）に記している<sup>41</sup>。『公開状』の続きから、かつてのヴォイドフスキからは想像すら出来ない激烈さで、戦後ポーランド社会の、とりわけ「ユダヤ人不在の反ユダヤ主義」を弾劾する個所を引用してみよう。

暗い、死をはらんだ過去の破片が今なお人々を傷つけ、普通危機の時代にはそうであるようにアンティセミティズムのヒュドラが息を吹き返す。そのひとつの頭を切り落としても、すぐにもうひとつの頭が再び生えてくる。それは多くの形を持ち、常に至るところに存在しており、どんな場所でもどのような姿を

取るか我々には相変わらず分からない。比喩的に、また単純化して我々はそれを伝染病と呼んでいるが、医者なら誰でも、伝染病は流行病的形態と風土的形態の二様の形態をとることを君たちに教えてくれるだろう。昔ナポリで突然コレラの流行が始まり、やがて終息したが、それは何万人もの犠牲者を吞み込んだ疫病だったし、今でも数年ごとに新聞で単発的な病気の事例について読むことが出来るだろう。医者なら誰でも、ナポリでは今日までコレラが潜伏して、風土的状态で続いていることを知っている。アンティセミティズムの場合も同じ様なものだ——全ヨーロッパに波及し、幾百万ものユダヤ人の生命を呑み込んだ大流行は過去のものとなったが、時折、発作的な病気の再発が観察される。なぜなら現在アンティセミティズムは風土的状态で続いているからである。過去の冷酷な教訓に学んだ我々はその発達を抑えることが可能なこの現象を監視し、観察しなくてはならないし、巨大な火災となつて今にも燃え上がろうとするおきがくすぶっている多くの場所が中・東欧にはいまだに沢山ある。また、「ユダヤ人不在のアンティセミティズム」が存在しており、それは私の国、ポーランドに暮らせば納得することが出来る。一握りのユダヤ人および彼らともどもユダヤ系ポーランド人が、彼ら自身は一切、社会的に勢力を持った民族的マイノリティーを成していないにも拘わらず、脅威に晒されて暮らしている。キェルツェにおける流血のボグロム<sup>42</sup>やクラクフでの同様の事件<sup>43</sup>にも拘わらず、戦後、列車から引きずり出され、線路ぎわで射殺されたホロコーストの生き残りの犠牲者たちに対する襲撃にも拘わらず、民族右翼と「三月の準教授たち」の暗黙の同意のもとで着手され、実行された一九六八年のモチャル<sup>44</sup>のスキヤンダラスな騒動にも拘わらず<sup>45</sup>——我々は自らの生地<sup>46</sup>に留まった。なぜなら、人間はどこで生まれたかに責任を取れないからである。我々は古い墓地と新しい墓地の番人なのである。ホロコーストの痕跡を守り、ポーランドで最後のユダヤ人の新聞『フォウクス・シュティメ』<sup>46</sup>を発行し、第二次世界大戦の

時期の記録を歴史研究所<sup>47</sup>で守り、質素な祈りの家で父祖たちの信仰を育み、アシュケナージの伝統を継承している。わが国のかつて豊かだったイディッシュ文学の相続人たちはとうの昔に世界中に散らばった。ごく僅かな生き残りたちは、この国が我々の避難所でなくなる時がやって来るのを恐れている——我々のユダヤ人父祖たちはそこで祖国を守ったのだ——一九三九年には銃を手に、ファシズムからのポーランドの独立のために戦い、そして後の一九四二年と一九四三年にはポーランド同胞側からの市民的支援も受けられず、孤立してトレ布林カとアウシュヴィッツの、マイダネックとソビブルの死体焼却炉で死んでいった同じ人々が、である<sup>48</sup>。

現在、絶滅はすべての人々が直面しているものであり、我々は自分の『宿題は済ませている』。ユダヤ人の子供はこの国のすべての路上で殺されてきたし、迫害から身を隠すことの出来る場所はなく、貧しい財産を略奪され、口汚く罵られ、耐え難い苦痛を受けて死んでいった——どうやら悪名高いキリスト教の慈悲はそんなに遠くには及ばなかったようだ。恐喝と身代金の強要は身を隠し、追われていた我々にとっては日常的な駆け引きだった。そして、世論が誘拐や人質を取り、彼らの命を助ける代わりに身代金を取ったというニュースによく動転させられている今、孤独なユダヤ人にはすでに半世紀前にこうした卑劣なことが実行されていたことを、事後のこととして記憶してもらいたいものだ。当時は誰もユダヤ人の味方をしようとはしなかったし、どんなニュースも同国人の世論を揺さぶらなかつたし、どんな言及も新聞や雑誌に現れなかつた、半世紀の間、それはポーランドでは国是を脅かすタブーのテーマだった。その通りだったのだ——そうであつて、それ以外ではなかつたのだ。我々はいわばパイオニアであり、今日一般的に用いられている野蛮な風習の最初の犠牲者だったのである。

アンティセミティズムは今日、ホロコーストの衝撃に激しく揺さぶられた西欧の世論によって絶望的になり、公然と注意を喚起されて、昔より洗練された形態を取り、ある種の哲学・神学傾向の仮面を被っている。もし私がまだ若いネオナチズムの荒っぽい悪ふざけを不問に付すとしたら、それは彼らの挑戦と不安を呼び起こすスローガンを見くびっているからではなく、社会の上層部に根を下ろしている隠れた国粹主義（排外的愛国主義）とその理論的知的な仮面が、エスタブリッシュメントの社会と圧力集団を悩ませている国内の風潮の方がユダヤ教にとってはるかに危険であり、我々の生活の将来の展望に重くのしかかっていると考えるからである。どのような——ディアスポラとイスラエル国家との——観点から眺めるにせよ、社会生活の形態と政治の方向に影響を持つ文化とエリートの中のこの二つの勢力は現代のユダヤ人にとってはるかに深刻な問題になっている。それに目を閉ざすことは出来ないし、軽視してはならない。反ユダヤ主義過激主義のけたたましい、野蛮なスローガンはユビター灯やテレビカメラの光の中や新聞紙上では自ずから正体を暴露する。なぜならそれはとうに知られている評判を失墜した論拠を利用しているのであり、この論拠は流布するかもしれない——それは否定しない——が、ある条件のもとでのみである。ごろつきどもが町に出て、今のところは通行人の反感と抵抗だけを呼び覚ましている。しかしながら我々をはるかに注意深く見守らなければならぬのは大学や文化や政界の上層部、神学の中で、従つてユダヤ教との柔軟な戦いの新しい、そして新しい概念に適合させた道具が鍛錬されているあらゆる場所で生起していることがらである。あちらでは——簡単に撮影できる棍棒と格闘用指輪が、こちらでは——どんな感光板にも定着しない策略と詭計が、あちらでは——全体を不安にさせる叫喚と拳骨が、こちらでは——みだりに忍耐を強えず、遅延反応を当て込んだ耳打ちと穿鑿。誤つたものは一見正しいものより危険ではないというのは古い真理である<sup>49</sup>。



「もし、この本の中で、語り手の父が家具職人であるとしたら、つまりは私の父が家具職人であった、ということであり、家族がスレブルナ通りから塀の中のクロフマルナ通りに移された、という個所があるとしたら、つまりは私がそこに住んでいた、ということである」と宣言し、「当時のワルシャワの通りの姿とその彩りを描きつくすことが自分の夢で」あり、「現実には最も豊かな想像力よりもアイデアに満ちているものだ」として、『死者に投げられたパン』の中で、ワルシャワ・ゲットーという悲惨な運命を辿ったユダヤ人社会を深い愛情を込めて描き出した<sup>50</sup>というヴォイドフスキの『死者に投げられたパン』（恒文社）の中から引用してみよう。この長編小説には、現実似て、物語の枠組みは存在しない。同じように閉ざされた空間と時間の中で生起する事柄に加えられる判断もない。従って引用もまた作者自身である主人公の少年、ダヴィッドが「目で」とらえる現実の断片でしかない。だが、その断片の重なり合いの中に少年ボグダン・ヴォイドフスキの目がとらえた、ワルシャワ・ゲットーのすべてがある。最後の場面ではこの世界は「突撃隊長ヘッフレの目の前で、ウムシュラクプラッツへと歩んで行き、聖書の創世記と族長たちの系図が絶滅へと歩んで行き、自然科学者たちの宇宙が歩んで行き、生と死に対するすべての姿勢が歩んで行き、宗教と無神論が、希望と宿命論が歩んで行き、アリア人側の放送を傍受して知っている塀の向こう側の世界が歩んで行く。すべては不気味な行進の中に没し去り、ゲットーについての真実を作家に書かせた詩的省略の技巧とともに没し去る」<sup>51</sup>のである。

ロシュ・ハツシャナ、新年祭が希望をもたらすことなければラツパの音も

響かせずに過ぎ去り、ヨム・キツブル、贖罪の日が悔悟の念を見せずとも終わ里、スツコート、収穫と豊饒の祭がパンなしにやってきた。人びとの顔は飢えて黒ずんでいた。秋の日の太陽はすべての者を脅かすチフスじらみのごとくに、町の上空にかかっていた。

死ぬべき者たちはすでに死に、これから死ぬことになっている者たちは、自分の番を待ってまだ生きていた。空腹に追い立てられて暗い暖房のない穴ぐらから出て、夜中、人気の絶えた街路をとがめ立てされることもなく群ごと叫び、騒ぎ立て、空のブリキ缶を鳴らして走り回った。途中にしらみをこぼし、ぼろの固まりを落とした。だぶだぶの衣類の端切れに身をくるんで力無くよろめき、歩くひからびた骸骨たちは、激しく号泣しながら地面に倒れた。彼らの叫び、脈絡のない訴えが窓を打った。翌日、守衛たちは死体に紙をかぶせて歩いた。悪疫が塀の内側に蔓延し、町の他の地区でも発生しかねないおそれが、通りの出口前や境界壁の下水溝ぞい、そしてねずみやパン用の袋を持ち、目にチフス性の熱を浮かべた年端のいかめ閣屋たちが通り抜けられるあらゆる場所の警備を強化するようドイツ人たちに促した。布告は生者をも死者をも警告していた（一六三頁）。

ウリは気を悪くして黙り込んだ。バウム先生が肩からずり落ちて床を引きずっている毛布をかけ直しながら言った。

「わたしらの生命だけではなく、生きていること自体への信念も奪っている。何が言えます？ こじや、どこもかしこも苦しみばかり。どの家の中もだ。だがもし塀が開放されたりしたら、世の中、恐怖のあまり叫びださないように、指を噛むに違いない」

イエフダおじは腕を上げて、暗くした窓を指した。

「それで世界中がすっかり黙りこくって、わたしたちが飢えやチフスやしらみ

ごと、ぼっかり口を開けた穴の中に追い込まれる日がくるのを待っているのだ！」

ダヴィッドは震えながら、火のそばの箱に座って体を動かしていた。髪の毛の中に母の指を感じ、顔のすぐ上に彼女の目が見えた。母は櫛を手にして厳しい声で言った。

「また、今日もテーブルについて頭を掻いたでしょう」

毛布がもとの位置に戻り、ぴたりくるまつたバウム先生が、片手で両端を抑え、もう一方の手をしまって暖めていた。

「誰もが、わたしたちの誰もが、それが未来のどんな役に立つかも知らないで、少しずつ疑ったものだ……ヨーロッパは、混沌に突き落とされたヨーロッパは、いつ立ち上がるんだろう？ 分かってますとも、もちろん。かつてあったものは過ぎ去り、いまあるものも過ぎ去る。いつの日か、今日の迫害者たちがいつさいの清算をしなければならなくなる日、顔に恥じらいを浮かべずともよい日がやってくる。だけど、誰に清算するのだ？ 彼らの犠牲者にですか？ 誰が穴から出てくるのですか？」

イエフダおじが身じろぎし、嘆れた声で言った。

「穴から出てくる者は、途中で石を投げつけられて殺される」

バウム先生は暗い顔でうなづいた（二二四頁）。

（祖父が）指を曲げて今度はダヴィッドを呼びつけた。近くに、もっと近くに寄れと命じてから囁き声で言った。

「おまえは逃げろ」

憔悴し、黄ばんだ顔、溶けた霜に覆われた眉毛、内側に向いたかすんだ目、老いて疲れ切った祖父の目が見えた。彼はその囁き声を聞いたが、理解できなかった。

「なんですか、おじいさん？ なんですか、おじいさん？」

老人は彼の方に体を傾けた。

「おまえは逃げろ、ダヴィッド。ここからなるべく遠いところへ」まだ彼は理解できなかったが、口もとの深いしわが動き、すり減って殆どない歯の間から静かな言葉が洩れてくるのをじっと見つめていた。「どこにでも人は住んでいる、どこにでも……利口な坊主、おまえならやってゆけるとも」

母がイエフダおじに向かって両手を差し伸べた。彼は黙っていた。母は懇願するように父に向かって両手を差し伸べ、櫛が地面に落ちた。

（……）

「もう潮時だ。潮時だ」と囁いた。「ここに生きて残れる者は一人もない。ダヴィッド、自分がユダヤ人だということを忘れる。生きるためには忘れることだ。きいているのか、ダヴィッド？ 生きるのだ……野良犬のように生きるのだ。そして人家を離れた野原を走れ。だが生きるのだ。誰をも、何をも恐れないことだ。恐れる者はしくじる。恐れる者は落ち着きをなくす。逃げろ、そして生きるのだ」

彼は不安になった。祖父の言葉と声が、彼に下された破門宣告のように聞こえた。今やこうして破門宣告が下り、彼はそれをわが身に引き受けねばならないのだった。

「残るのはおまえひとりだ。おまえのお父さんは気が弱いしやさしい。片足を一歩踏み出す前に二度考える方だ。今どきそれでは駄目だ。ダヴィッド、聞いているかね？ 考えるのではなく生きることだ。逃げるために生きることだ。逃げて、生きて、そして逃げるのだ。ユダヤ人をのしる者があっても黙っている。ユダヤ人を嘲笑う者があっても黙っている。すべてに目をつむり、耳を塞ぐのだ。自分がどういう者か、お父さんがどういう者か、おまえのお母さんがどういう者か忘れろ。おまえの先祖がどういう人だったか忘れろ。穴に追

落とされる同胞を目にしても眉毛ひとつ動かしてはならん。背を向けて、立ち去れ。ダヴィッド、聞いているかね？ 心を右にするのだ。聞いているのかね？ 頭の中からわたしたちみんなを追いつせ。そして生きるのだ。アーメン」(二二 三七―二三八頁)

夜、彼らはジェラーズナのボイラー所から飛び出して細い道を走って行く人がいるのを目にした。言ったり来たりし、逡巡していた。立ち止まり、また門の中に駆け戻った。はずみがついて真ん中に積み上げてあったがらくたの山に転がり込んだ。起きあがり、がらんとした窓の中を覗き込み、喘いでいた。

そのあと、階段への入り口をひとつひとつ叫びながら歩き回り、がらんとした共同住宅の中の隠れ場で震えているユダヤ人たちは一語一語、はつきりとそのおそろしい叫びを聞いていた。

「ユダヤ人たち、私の言うことを聞くんだ。ユダヤ人たち！ 私はラッフヴィアの者だ。クロノヴァ通り二七番地の……。ドイツ人たちに眠らされてはいけない。奴らはあんたたちに死を用意しているんだ。おとなしく処刑場に行つてはならん！ 奴らが言っていることは全部嘘だ。真実は別のものだ、真実は恐ろしいものだ。ユダヤ人たち、私は嘘いつわりのない真実を話しているんだ。わたしはラッフヴィアから逃げてきた。向こうでは、地方ではもうすでに始まっている。今度はあなただちに取がかつたのだ。コブレンはどこにある？ シエロキエはどこにある？ ストウプツェはどこにある？ クレツクはどこにある？ いらない……人っ子ひとりいないんだ。全員が虐殺されに連れて行かれたんだ！」

声を涵らし、息を切らせて喉から言葉を吐き出したが、言葉は血のように進った。

「ああ、ユダヤ人たち、わたしの同胞よ、ユダヤ人の心臓が鼓動していた町と

いう町が空っぽになっている。希望はない、救済はない。最期の時が来たのだ。武器を取るのだ……。武器を！ もう機は熟した、時が来た。ナイフを、斧を手に死ぬ方がましだ、おとなしく待つてゐるよりは……」

幽霊のように、わめき立てる幽霊のように、あらゆる階、あらゆる玄関口を、警備兵が駆けつけるまで歩き回った。

「同胞たち！ 裸で溝に追い落とし、背中に弾丸を撃ち込んでいるんだ。穴は埋めているが血が野原を伝って流れている。まばらなぬかるみのように。これらの墓塚のうえにしみ出している。大地がこれらの墓塚のうえで動いている。傷ついた者たちはこれらの墓塚の中で息ができずに獣のように喘いでいる。ユ

ダヤ女とユダヤの子供たちを生き埋めにして……。彼らからはあんな煙が出るのだ。彼らからはあんな炎が上がるのだ。窒息させ、燃やしている。巨大なかまどを立てている。このかまどをユダヤ人を薪にして焚いている。煙がもくもくと空にあがり、この煙はいたる所から見える……。ロ・ヤミン・アムムッド・ヘオノン・ヨマム・ヴェアムムッド・ハエシ・ロイラ・リフネイ・ハオム(主はかれらの前を昼は雲の柱となつて歩まれ、こうして彼らを導かれた。夜は火の柱となつて、こうして彼らが昼も夜も歩めるように照らされた)。ユダヤ人たち、覚えておくんだ！」(三七七―三七八頁)。

(……) 総統に栄えあれ！ ユダヤ民族が人類に感染させたコスモポリタニズムの病原菌は退治されるだろうし、ナツイオナル・パルタイはすでに効能ある薬を発見したのだ。党に栄えあれ！

歴史精神はドイツ軍の大砲の砲身を通じて語りかける。そうではないと言う度胸のある者は、まずは恐れずにそこを覗いてみるがよい。

「うるさくしないでくれ。おまえさんよ、これは天気の良い日に監視所を一回通過するだけの、子供を抱いた女用に発行された、しかもとうの昔に無効にな

った通行証じゃないか！」

「おまわりさん、これが私の通行証です、あ、これです……有効ですか？」

「おまえ何を押し込んだんだ？ お金？ 紙幣？ しかもムイナルキ？ 昨日はまだドル紙幣が出回ってたのに、今日は朝つばらからもう硬いのばかりだ」

「誰か子豚を持ってるか？ 誰だ？ こつちへ出てこい。左側の歩道だ。急いで、さっさとしろ！」

「まぬけ、どこへ行くんだい？ あそこへ行ったら金を巻き上げられて尻を蹴飛ばされたあげく、みんなと一緒にまつぐ クムシヤーフラッ 積替所に追われるんだよ。コップ一杯代の金は残しといた方がいいよ」

「どうかおせっかいを焼くのはよして下さい、どうかおせっかいを焼くのはよして下さい！ 誰でも自分の運命の鍵は自分が握っているんですからね！」

「何だと、このうすのろ！」

「モルトヘレスだ、俺の話を聞いているのかい？ 幼なじみのユレチェック・モルトヘレスを探してるんだ。先に伝えてくれ！ モルトヘレスがどこに行つたか、誰も知りませんか？ あのトファアルダですけど」

「図々しいわね！ あたしに口をとぎせてすって」

「人を家畜並みに扱ってるんだ。ぎつしり詰め込んで運ぶんじや足りなくて、何時間もの間、輸送を待つように命令してる。ごろつきどもめが、人の神経も体も大切だとは思わないんだ。何から何までめちゃくちゃだよ。生まれてこの方、こんななお目にかかるのは初めてだ……おまわりさん、すみませんが、わたしらの汽車はどっちの方角に出て行くんです？ 教えていただけませんか？ 正確には何時に出るんです？ どこに行くのかよく分からないで旅に出るなんて、生まれて初めてのこともありませんから」

「べちやくちやくちやくちやくち！ 口に栓をしなよ。梅干しじいさん、ここはお

しゃべりの席じゃない」

「気絶してしまつたわ、どうしましょう、気絶して……水！ 驚いたせいだわ」

「何時なのかまるでわからん。何てことだ。ほら、あなた、この時計ですよ。この二〇年間、一分と進まなかったんです」

「おまえさん、自分が何を言っているのか分かつてるのかね？」

『アイネ・ラッセ、アイネ・ツークンフト、アイネ・オルトヌンク！』人種はひとつ、未来はひとつ、秩序はひとつ。その到来をヘッフレは予言しているのだ。このように驚嘆し、魅せられた人類の眼前には千年王国の大建造物が、燦然と輝いている。だが建設には個人の労働と犠牲、自己滅却が要求される。未来に目を据え、遠方を見る者には、誇らしい夢想に満ち、煙たなびき、炎輝く光景が現れる。人は浄められ、種族は救われ、種は解き放たれて炎を越えて進むだろう。歴史はそれを忘れないし、すでに今日、その最も栄光に満ちた頁の数々が血で書きつけられている。歴史はそれを忘れないし、人類もまたそれをとこしえに忘れない。とこしえに（三五三―三五五頁）。

ヴォイドフスキにとつての書き方の理想は「リアリストの誠実さ」だった<sup>52</sup>。アリナ・モリサクによれば、ヴォイドフスキは文学を、それどころかすべての種類の芸術を世界との対話、現実の回答、出来事への反応ととらえており、公刊されていない「日記」（一九八二年四月―三月）のなかで「私の本はどれも現実からの逃避ではなく、常にレプリカだった。（…）『パン』はメタファーを用いた事実への回答だった。他の道は私にはなかった。ことによると文学の前には他の道はそもそもないのかもしれない」と書いているという。モリサクはポーランド文学の研究者として、こうした書き方の選択には、数多くのポーランド文学の担い手たちの「学校」であつたポーランド文献学を学んだこ

と評論家としての活動を挙げているが、そこにはテーマの要請も働いていると言えるだろう。マティヴィエツキもまた「彼を個人的に知っていた人々には、彼はあたかも自己創造の意識があったかのように、会話の前に、こう無言の内に耳打ちしているかに見えたものだ。『私は、些細な仕草の中で、身振り反応の中で、わが生の私自身の問題と普遍的な問題との証人なのだ』と。しかしそこには、銜いや気取り、殉教者気取りはなかった。むしろ、われわれが——知人や友人が——彼という人間をそういう証人に仕立て上げていたが、彼は、控えめに、遠慮深く、その不自然さにおいて自然に、証人であった。なぜなら、証人であらざるを得なかった。『パン』を書いていたからだ。私の知っているユダヤ人——ゲットーの子供たち——で、このような気取りなさ結びついた、これほどの証言記録の完全さを、毅然たる姿勢を保っていたものは他にひとりもない」と回想している。

ヴォイドフスキの作品の中で、一九七一年の『死者に投げられたパン』と一九八二年の『過越の祭<sup>53</sup>』、一九九三年の『運命としてのユダヤ教』の三つは十年ごとに繰り返し取り上げられてきた「証言」として特筆される。他ならぬ一九六八年に捉えた半ば幻のような、半ば現実的なポーランド・ユダヤ人の世界を描いた短編『過越の祭』について語るには、改めて戦後のポーランド・ユダヤ人の状況を見なくてはならないだろう。

## (一)

ポーランドは第二次世界大戦中、ナチス・ドイツによるいわゆる「ユダヤ人問題の最終的解決」の主たる舞台となった地である。従って、

ポーランドの文学が戦後、ホロコーストの問題と向き合わずに過ぎずわけにかなかったことは言うまでもない。それどころか、第二次世界大戦とナチス・ドイツによる占領の体験から生まれたポーランド文学を研究対象としてきたタデウシュ・ドレヴノフスキは、一九八六年に書いた、戦後ポーランドを代表する詩人、劇作家のタデウシュ・ルジェヴィツチ<sup>54</sup>に関する評論「アウシュヴィッツ<sup>55</sup>後の詩を作ること<sup>56</sup>」の中で、「アウシュヴィッツ後の詩（芸術）」という「現象の術語と理論は（もはやその根底に横たわる歴史的事実自体には戻らないとしても）外国起源のものであったとすれば、実作の中の『アウシュヴィッツ後の詩』はまずもってポーランドで、それもずっと早く、理論的準備や集団的努力もなしに生まれた。まだ戦争中に（従ってアウシュヴィッツの間に）、そして戦後すぐに——分かり切った理由から、歴大な数の、時に文学的に優れた、受難文学の中で——それははつきりと特筆さるべきもの、何よりもまず若い人たちの仕事となったのであった」と述べ、二〇年代生まれの作家たちを中心に——タデウシュ・ボロフスキ、アンジェイ・チシェヴィンスキ、タデウシュ・ルジェヴィツチ、マレック・エデルマン、ヤン・ユゼフ・シュチエパンスキ、タデウシュ・コンヴィツキ、ボグダン・ヴォイドフスキ、ボフダン・チェシユコ、ミロン・ビャウオシェフスキ、アンナ・シフィルシュチンスカ、スタニスワフ・グジェシユク、ハンナ・クラルを、また少し年長のアドルフ・ルドニツキ、コルネル・フィリポヴィツチ、レオポルト・ブチュコフスキ、ゾフィア・ナウコフスカ<sup>57</sup>らの名前を挙げている。ファシズムとの戦いの中で成長を遂げていったこの世代のポーランドの作家、詩人たちの作品を分析しながら、ドレヴノフスキは「ほかのどの文学が同じような多様性と先駆性を誇ることが出来るだろう

か。どこで同じように大胆かつ綿密に戦争のあらゆる帰結と現代に与っての含意を分析し尽くしたであろうか。もちろん、ルネ・シャール、ネリー・ザックス、パウル・ツェラン<sup>58</sup>の詩があるが、それらは孤立した、厳密に個別的なものである」と断言している。

この「絶滅の文学」（因みにこの「絶滅」は「絶滅収容所」という時と同じ語を用いており、ホロコースト、ショアーと基本的には同じ対象を指している）という表現はポーランドでものちに「ホロコーストの文学」という表現に——最初はそれまで用いられてきた「絶滅」「ジェノサイド」ではなく古代ユダヤ教の全燔祭を意味する「ホロコースト」という表現自体に些かの抵抗を示しながらも——取って代わられることになるが、それとともに、「ホロコーストの文学」は「戦争と占領」の文学一般ではなく、ナチス・ドイツによるユダヤ人絶滅——とりわけユダヤ人の強制収容所体験を主題とした文学を意味するようになっていった。しかし、ユダヤ人絶滅が実行された地であると同時に、第二次世界大戦勃発の地であり、ナチス・ドイツの占領下で直ちに市民レベルの武装抵抗が組織され、ナチス・ドイツの刑務所や強制収容所に政治犯やさまざまな囚人として多くの市民が投獄・収容・虐殺されたポーランドでは、ポーランド人の作家・詩人もまた「ユダヤ人絶滅」の証人としてホロコーストの文学を担うことになった。

ドレヴノフスキはポーランド文学のこの流れの——とりわけルジェヴィツチの戦後最初の詩集『不安』『赤い手袋』<sup>59</sup>の——視座を成しているものにポストカタストロフィズムという名を与えている。彼によれば、ルジェヴィツチの戦後の詩のデビュー作品には、タデウシュ・ボロフスキの作品から立ち現れた「戦いの後の風景」（アンジェイ・ヴァイダの映画のタイトル）<sup>60</sup>同様に、「カタストロフィーの後の風景」、絶

滅の後の風景、あるいは大洪水の後の風景が一面に広がっているのである<sup>61</sup>。

ところで、この論文にはまだ「ホロコーストの文学」という術語が現れないことを強調すべきであろうか。先に述べたように、社会主義の時代にタブーとされたユダヤ人とポーランド人の複雑な関係の歴史が真正面から論じられるようになるには八〇年代後半を待たねばならなかった。戦後ポーランドでは「共通の受難の場所」でさえが（ポーランド人とユダヤ人を）結び付けるよりも分かつことの方が多いのである。全時期を通してポーランド人民共和国のプロパガンダはオシフィエンチム収容所ではポーランド、フランス、オランダ等々の市民が虐殺された、と発表してきた。これらの言葉を目隠しに真実を隠蔽してきたのであった。つまり、アウシュヴィッツツルビルケナウの犠牲者の九〇パーセント以上がユダヤ出自のせいで命を失った、ということである<sup>62</sup>。『ヴィエンシ』の特別号で、ユダヤ人とポーランド人の関係についてポーランド人の立場から書いたヤツェク・ボルコヴィチはこう語り、続けて「新しいポーランドでこの欺瞞と訣別したのは結構なことだ」と断言しているが、このオーウェルのニュー・スピーチ風の表現には、筆者自身が絶えず悩まされ続けたものであった<sup>63</sup>。それが、ナチス・ドイツの苛酷な占領に対する市民の英雄的な武装抵抗の歴史の神話化の一方で、例えばワルシャワでは、一九三九年の時点で人口の三割以上を占めていたユダヤ人の運命との係わりについてほとんど触れずに済ますことを可能にした魔法の杖の役割を果たしていたことは疑いない。ボルコヴィチは、犠牲者にユダヤ人、ポーランド人、等々といった単純化した、〈形容詞なしの〉分類<sup>64</sup>を施すことは、「ユダヤ人側が、ポーランド人あるいはカトリック教会によるアウシュヴィッツ

ツの記憶の（私物化）の意図についての不安をまだ拭えきれない状況では不可欠のものであるように思われる」。そのようなやり方では、アウシュヴィッツの悪という極めて稀有な現象を叙述することはできないからであり、近年のポーランド人・ユダヤ人関係におけるアウシュヴィッツ問題の本質はここにある、と言う<sup>65</sup>。

戦後初期には、本稿で絶えず言及することになるボロフスキやルドニツキ、アンジェイエフスキ、ナウコフスカらが積極的に関組んだホロコーストのテーマがポーランド文学の中から消え去り、ただひとりヴオイドフスキが文壇の深層で書き続けたあげくに、新しい時代の訪れとともに再び表面に顔を出した、と言うべきかも知れない。

アダム・ミフニクは、「ホロコーストの証人であり、犠牲者であり、協力者」であったオトフォックのゲットーのユダヤ人警官で、自らの手で妻と娘をトレ布林カ行き汽車に送り、ワルシャワ蜂起をも生き延び、一九四四年末に強盗団によって殺されたツアレル・ペレホドニクの残した回想録『わたしは殺人者だろうか』<sup>66</sup>の出版を巡って一九九三年に『ガゼタ・ヴィボルチャ』紙上で繰り広げられた論争<sup>67</sup>の中で次のように述べている。ここには戦後のポーランド人とユダヤ人の関係にポーランド人が作り上げてきた自らの歴史神話の破壊に対する抵抗が保わっていることが読み取れよう。

蜂起に関するあらゆる議論は、きわめて激しい感情を引き起こす。というのはそれがどす黒い反蜂起プロバガンダの文脈に書き込まれてきたからである。チエスワフ・ミウオシュ<sup>68</sup>やステファン・キシエレフスキ<sup>69</sup>あるいはメルヒオル・ヴァンコヴィツチ<sup>70</sup>の戦後の有名な批判的発言は、計量不可能な価値なるものを持ち出す頑強な抵抗の壁に出会った。この抵抗の意味は簡単である。自

由を失い、苦悩にあえぐ国民の存続が問題になっている時は、歴史の真実を振り出すべき時ではないし、国民がテロを受け、自らの過去に関する日常的な欺瞞に取り巻かれている時は、罪や過ちの清算の時ではないということである。タデウシュ・ボロフスキがオシフィエンチムをテーマとした残虐小説を出版した時、ヤン・ユゼフ・シュチエパンスキが反ナチス活動をしていた女性バルチザンの墮落についての有名な短編小説『靴』<sup>71</sup>を著した時、ミロン・ビャウオシエフスキが『ワルシャワ蜂起回想録』<sup>72</sup>を著した時——常に歴史的真実と自らの誤謬の清算の名のもとで神話を解体することには賛成できないという同じ発言が聞かれたものだった。

これらの議論を注意深く見守りながら私は内面的葛藤を味わっていた。私は、頭ではボロフスキやシュチエパンスキやビャウオシエフスキの側に立つたが、心のどこかでは彼らに反対している人や批判している人をもよく理解できた。蜂起や国内軍の伝説の神話化された英雄的イメージが、証人や作家や歴史家の批判的判断に委ねられた時、私の中で何かが動揺したのである。蜂起の伝説はポーランドの聖なるものの一部となっていたのであり、それゆえどの異なる声もが——私自身の無意識によっても——聖なるものへの攻撃として扱われたのである。

アドルノの「アウシュヴィッツ以後、詩を書くことは野蛮である」という有名なテーゼにも拘わらず、パウル・ツエランの詩「死のフーガ」やネリー・ザックス、エリ・ヴィーゼル、イエールジ・コジンスキー（本来のポーランド語ではイエジ・コシンスキ）、ヤーコフ・リント、プリモ・レヴィイらの文学作品を分析することによってホロコーストの文学の可能性を考察したローレンス・ランガーの著書『ホロコーストの文学』<sup>73</sup>はこの点で多くの示唆を与えてくれる。ランガーはこの本の

序文でわざわざ「また、タデウシュ・ボロフスキの『皆さま、ガス室はこちらです』<sup>74</sup>には簡単にふれたにすぎず、残虐の文学の一範例というべきこの作品がもっている衝撃力や偉大さに見合うだけの扱いはしていない」と述べてタデウシュ・ボロフスキの作品『皆さま、ガス室へどうぞ』について高い評価を与えている<sup>75</sup>。ツェランはじめ、ここに取り上げられた詩人、作家がユダヤ系であるのに対して、このボロフスキはアウシュヴィッツとダハウの強制収容所体験者ではあれ、ユダヤ系ではない。ランガーは、ボロフスキの短編『ここ、アウシュヴィッツでは……』の物語の最後の場面を引用しながら「彼はあたかも、自分自身の芸術があまりに過度の成功を収めることに對して恐れを抱いているようである。つまり、話し手の口調の見せかけの無関心のために、読者がそれに類した平静さを抱いてしまい、その結果登場人物の心に生じた隠微な変化を認めることがないまま『素通り』する危険性に対して、危惧の念を抱いているかのである。ボロフスキが弾劾する『途方もない』『醜怪な嘘』は、突如我々に恐ろしい事実を直視させる。つまりわれわれもまた、（知性の上では）物語の背景には残酷が存在したことを意識しながら、それらが我々自身に関係ある人々の身の上ではなく（あるいは心理的にそれを延長すれば、われわれ自身ではなく）他人の身に起こったことであることに安堵して、異常なものを正常なものとして受け入れる誘惑にかられたかもしれないという恐るべき事実である。突如われわれは、ひとつの物語を觀賞する冷静さから引き離され、歴史に根づいたその物語の事実に気づくのであり、驚いて自らの想像力のねばけまなこをこすった後で、自分の反応を文学的反應と現実の反應とに区分けしようとするのである」<sup>76</sup>とボロフスキの「石の世界」（ボロフスキは強制収容所の世界を描いた短編集の

ひとつにこのようなタイトルを付けた）の文学の特異性を分析したが、このボロフスキの文体はのちに、スターリニズムの時期に、収容所を体験した人間には想像もできない、文学のジャンルを事実のむき出しの報告に限定したような無味乾燥な文体だと非難されることになる。「絶滅の文学」の寵児として登場したボロフスキではあったが、一九四九年にシュチェン文学者大会で収容所文学が「社会主義リアリズムの前提に反する」として受けた激しい批判、文化大使の任を帯びて滞在した旧東独体験が彼を激しい社会主義リアリズムの鼓吹者に一変させる。ドレヴノフスキは『石の世界からの逃亡——タデウシュ・ボロフスキについて』<sup>77</sup>の中で、この時ボロフスキは「石の世界」と訣別したのでとする。ボロフスキは収容所体験の作品群を自ら「ファシズムのイデオロギーとの客観的な同盟」であり、『石の世界』は「ペシミスティックな馬鹿話の連作」であり、自分は「出版社の煉瓦職人」ではなく、自分は「心を閉ざした作家」であり、「これまで自分が書いてきたものを社会的に活用する可能性があるとは思えない」<sup>78</sup>と激しい自己批判を展開するのである<sup>79</sup>。このボロフスキは社会主義リアリズムのトップリーダーとして活躍の絶頂にいた一九五一年七月、ガス自殺を遂げる。ボロフスキの転向の理由には収容所文学が読者に迎えられないといった個人的な悩みとともに、ドイツへの絶望があったと考えられている。「キリスト教とヨーロッパの伝統はナチスのファシズムに對して責任を負っている。帝国主義時代の全ブルジョアジーは不可避免的にファシズムへ向かい、ファシズムは——戦争へ向かう。（……）ある点からすると、社会主義により近い者は公然の敵よりもっと悪い。なぜなら、それはカムフラージュされた敵——『帝国主義的社会主義』だからだ」とこの激しいスターリニストは当時の自由主義者、



改革派、ドゴール主義者、テイラー主義者を切って捨てたのであった。その死は五三年春に訪れることになる「小雪解け」を予感してのことか、と憶測されたものであった。

ヴォイドフスキ自身が『マサダ』に執筆した二つの論文のうちのひとつ、「『神の奴隷たち』あるいは契約の思想<sup>80</sup>」には、ボロフスキの死について次のような言及がある。「ガス栓をひねって開けた時、ボロフスキの思考は、こうした暗い不安の病棟のどこかに立ち止まったのであるうか。『しかしそれは収容所全体と同じく、世界全体と同じく嘘であり、グロテスクだ』。強制収容所の生き残りの自死は、彼の手からペンを取り上げ、答を押し込んだ制度に対する重大な弾劾であった<sup>81</sup>」。

「こうした暗い不安の病棟」こそがこの「過激な」論文でヴォイドフスキが問題にしたテーマであるが、それには後で戻るとする。まずはここで、強制収容所の中で、ポーランド人政治犯として、ユダヤ人絶滅に立ち会ったボロフスキの描く収容所の世界を、短編『ここ、アウシュヴィッツでは……』(この小説は恋人にあてた書簡体の形式で書かれている)の結末部分と「皆さま、ガス室へどうぞ」(『ポーランド文学の贈りもの』恒文社)の一部を通して見てみよう。

ブロックのそばから突然小さな人の群れが次々飛び出してきては、行進の隊列に襲いかかり、目にとめた包みを奪い取っていくんだ。悲鳴と罵り声と拳骨が空中で渦巻いていたね。ようやくゾンデルが収容所の他の部分と塀で隔てられた自分の中庭の門の中に消えた。しかしすぐにユダヤ人が商売と工面と訪問のためにこっそり抜け出してきはじめた。

俺はその中のひとり、前の俺たちのコマンド(特別処理班)で一緒だった親

友に声をかけた。俺の方は病気にかかってKBに行ったが、奴はもって『運』に恵まれていて、ゾンデルに行ったんだ。いつだってボール一杯のスープでシヤベルで仕事をするよりはいいからね。

「おや、おまえか。何か要るのかい。もしリングを持ってるんなら……」

「いや、君にやるリングはないよ」と俺は愛想よく答えた。「まだ死ななかったのか、アブラメツク。変わりはないかね」

「別に何も。チェコ人をガスでやったよ」

「それは知ってるよ、君がいなくとも。君個人はどうだ」

「俺個人だって？ 俺にどんな個人があるって言うんだい。煙突、ブロック、また煙突、がかい？ 誰か、俺に、ここにいてるってのかい？ ほう、知りたいのか——個人的にね。煙突で焼く新しい方法を俺たちで考え出したぜ。分かるかね、どんなのか」

俺は大変丁寧に知りたいそぶりを見せた。

「いいか、こういうんだ。髪の毛のあるガキを四人連れてくるんだ。頭をくっつけて髪の毛に火をつける。あとはひとりでに燃えて、万事オーケーだ」

「おめでどう」俺はぶつきらばうに、そっけなく言った。

そいつは奇妙な笑い声をあげると、俺の目を覗き込んで、こう言った。

「いいかね、招待客殿、ここ、アウシュヴィッツでは、俺たちは何とかして楽しまなきゃならないんだ。さもなければどう我慢出来るって言うんだ」

ポケットに両手をつまむと、奴は別れの言葉も告げずに立ち去った。

しかしこれは、収容所全体と同じく、世界全体と同じく、嘘であり、グロテスクだ(『ここ、アウシュヴィッツでは……』)<sup>82</sup>。

荷物やトランクや包みやリュックサック、ひざかけや服や袋の山が大きくなり、落ちて開いてはカラフルな、色とりどりの紙幣や金や時計がこぼれる。車

輦の扉の前にはパンの山がそびえ立ち、いろんな色のマーマレードやジャムの瓶が集められ、ハムやソーセージの山が膨らんでゆき、砂利の上に砂糖がこぼれる。子供のことで悲嘆にくれる女たちの叫びとわめき声のなか、そして突然ひとりぼっちにされた男たちの茫然自失した沈黙のなかを、人間をぎゅう詰めにした自動車があるすごいエンジン音を轟かせて出発していく。それは右に向かった人たち——若く、元気な人たちだ。彼らはラーゲルに送られる。ガスを免れることはないが、まずは働くことになる。自動車が出發して行つては戻ってくる。休みなく、まるでおそろしいベルト・コンベアーのように。赤十字の救急車がたえず走りまわっている。エンジンのボンネットに描かれた、血のように赤い巨大な十字の輪郭が、日光を浴びてかすんでいる。赤十字の車はあきもせず走りまわっている。ガスを——この人たちを中毒死させるガスを運んでいるのは、まさにこの車なのだ。

階段のそばに「カナダ」の連中は息つく暇もない。ガス送りの人びととラーゲル送りの人びとを仕分けし、前者を階段に押し出し、車に詰め込んでいく。それぞれの車に六十人ずつ、おおよそそこそこだ。

横に顔をつるつるに刺った若い紳士、親衛隊員がノートを手にして立っている。車一台が一本の線、十六台の車が出て行けばおおよそ千だ。紳士は冷静沈着、綿密だ。彼に断りなく、また彼の線なくして車が出て行くことはない。

オルトシグ・ムス・ザイン

規則が必要だ。線はどんどん膨らんで膨大な数に、全輸送列車の数になる。

その輸送隊は手短かに「テッサロニキ」、「ストラスブルール」、「ロッテルダム」と呼ばれている。この輸送隊は早くも今日、「ベンジン」と呼ばれることになるだろう。しかし永続的には「ベンジン」ソスノヴィエツ」の名をもらうことになる。この列車からラーゲルに向かう者は一三一一三二の番号をもらう。

もちろん、掛ける千であることはいうまでもないが、略してまさにこう、一三一一三二と言うことになる（『皆さま、ガス室へどうぞ』二五〇〜二五二頁）。

「ねえ、アンリ、ぼくらは善人だろうか」

「なぜそんな馬鹿なことを聞くんだ」

「それがね、君。僕の胸に、あの連中に対するまるでわけのわからない怒りがこみ上げてくるんだ。連中のせいでぼくはここに入っていないなければならないんだ。連中がガス室に送られるからといって、ぼくは全然同情しない。ひとり残らず地獄に落ちればいいんだ。拳固を振り上げて連中になぐりかかりたいくらいだ。やつぱりこれは異常なことだろう。僕には理解できない」

「やれやれ。正反對だよ。それが正常で、予定され、計算されたことなんだ。積み卸しホームが君を苦しめ、君は抗っている。ところが、怒りをぶちまけるには、自分より弱い人間を相手にするのがいちばん楽だ。それどころか、君がその怒りをぶちまけることが望ましいわけだ。良識的に言えばだがね。

おわかり？」（同二五五頁）

僕は車輦に乗り込み、赤ん坊を運び出し、手荷物を放り出す作業にあたった。死体に触りはしたが、こみあげてくるはげしい恐怖にうちかつことができなかった。僕は死体から逃げてまわったが、それはいたるところに転がっていた。

砂利の上や、ホームのセメントの端や、車輦のなかに枕を並べて。幼児、むかつく裸の女、痙攣に身をよじる男たち。僕はできるだけ遠くに逃げる。誰かが

革の鞭で僕の背中を打つ。悪態をついている親衛隊員をまなじりでとらえ、す

るりとその手を逃がれて、僕は縞服の「カナダ」のグループのなかにまぎれ込む。ようやくまたレールの下にもぐり込む。太陽が地平線の上に大きく傾き、

血の色をした夕陽が積み卸しホームに降り注いだ。樹木の影がおそろしく長く

なっていた。自然界にあつて、夕刻が迫ると落ちる静寂のなかに、人間の叫喚がますます大きく、ますますしつこく、天高くわきあがる。

ここからなら、レールの下からなら、ようやくとこつたがえす積み卸しホームの地獄絵がすべて見わたせる。そこでは今、一組の男女が、死にもの狂いの抱擁に、もつれ合つて地面に倒れたところだ。男は女の体に懸命に指を突き立て、歯で服をくわえた。女はヒステリックにわめき、ののしり、悪態をつき、ついには靴で踏みつけられて喉をぜいぜい鳴らし、口をきかなくなる。二人は木のようにまつぶたに間をさかれて、家畜のように自動車に追い込まれる。

こつちでは「カナダ」の四人が死体を持ちあげている。むくんだ大女だ。彼らは悪態をつき、力をふりしぼっているで汗だくだ。犬のように耳をつんざく泣き声をあげて、積み卸しホームじゅうをあちこち歩きまわっている迷子の子供たちを、足蹴にして追い払っている。子供たちの襟首や頭や手をつかんで人の山に、トラックに放り込んでいる。先の四人は、大女を車に持ちあげられないでいる。ほかの者を呼び、みんなで苦勞して肉の山を無蓋車に押し込む。積み卸しホームじゅうから巨大な、膨れあがつた死体を運んで一ヶ所に集めている。そのなかに、不具者や、体が麻痺して動けない者や、押しつぶされた者や、意識を失った者たちを投げ込んでいる。死体の山が動き、哀れっぽい声をあげ、大声でわめく。運転手がエンジンをかけ、発車させる。

「止まれ、止まれ！」ハルト 遠くで親衛隊員がどなっている。

「止まれ、止まれ。くそつたれ！」ハルト (同二六二―二六二頁)

ヴォイドフスキの『死者に投げられたパン』の主題がはつきりと定まるのはボロフスキの自死を経て十年後のことであつた。そしてこの作家の過激さは自らの自死の直前になって、「今現在」のポーランド・ユダヤ人の状況を一切の「事前の考慮」なしに捉えようとする。再度『公開状』の結末に近い一節を引いて、次のテーマの導入部としよう。

人間の生に対する宗教的關係を特徴とするユダヤ教は、他の人々なら待つてゐる言葉を口にせずにはいられない。我々は発言することを使命と感じており、ゲットーの中で、ガス室で、死体焼却炉で、屠殺人の処刑の穴の中で、その使命の代償を支払つたのであつた。独りぼつちで口汚く罵られたユダヤ人が虐待されることはなかったであろうポーランドの地には、このような場所はない。ユダヤ人はユダヤ人であるというただそれだけのことで、金持ちは——金持ちであることで、貧しいものは——貧しいことで、正統派の人は——正統派であることで、開明派の人は——開明派であることで、迫害され、絶滅を宣告されてゐた。子供は子供であつたことで殺されていき、老人は——老人であつたことで殺されていった。唯一神を信じる神の子たちを守るために時機を失せずいかなる声も上がることはなかった。ゲットーの中への集中と飢餓による衰弱、移送の組織、隔離のなかでのガスによる殺戮、死体の焼却と痕跡の抹消——これがユダヤ教が辿つた現存から絶滅にいたる道のりである。多くの言語の専門家＝刑吏と彼らの助力者の軍団がこの手続きに全員一致で雇われており、いかなる機械の歯車も止まらなかつた。ヨーロッパで最も強力な抵抗を誇り、事実バルチザンの戦いが続いており、愛國的情熱でもつて占領軍の将校たちを肅清し、占領者の武器庫を破壊し、彼らに対する諜報機関が見事に活動しており、前線へ向かう軍用列車が走る線路を毎日爆破していた国で——絶滅収容所へ向かうユダヤ人輸送列車のひとつとして途中で止められることがなかつたのだ。ひとつの輸送列車もだ。あれだけの年月の間に。ユードンフライマッフンクに対する暗黙の諒解と全体的な容認がゆえにでないとしたら、この事態をどう捉えればよいのか、どう理由づければよいであろうか。しかもそれはキリスト教の国で、何世紀も前からキリスト教に対する貢献に疑問の余地のない国で、自らのキリスト教起源を愛國主義の伝統と等しく大切にしている国で、半世紀

が過ぎた今、もはやヴィスワ河畔からは証人の世代は追放されたとの希望のもとに、公然と、新たな聖戦のスローガンを唱えている国で起こったことなのだ。

ユダヤ人不在のアンティセミティズムは新しい現象であり、ユダヤ教が自らの道程で初めて出会うものである。それは、我々が去った後に残した空白の中でさえ、今なお（凶鳥である）フクロウの声が墓場に響きわたり、敵意に満ちた、無思慮な叫びが天に向かって沸き上がることを証している。あたかも彼らが、憎さ余ってこの天を引きちぎりたい、恥ずべき罪に満ちて天に押し入って神殿冒涇のようにそこを荒らしまくり、地上で成されたこの殺人に倣ってめくらめつぼうにもうひとつの殺人を行おうと願っているかのようである。今度は誰を全滅させようと願っているのだろうか。ナチズムが我々に試みた。スターリニズムが我々に試みた。その先は？ どんな制度が破壊の偉業の総合を成し遂げるのだろうか<sup>83</sup>。

これはどこへと導くであろうか。我々ユダヤ人は覆すことの出来ない体験に基づいて、風土病的状態にあるアンティセミティズムは国内に荒廃を広めることをよく知っていたが、ひとつのことだけは予測できなかった。つまり、他でもない民主主義の再生と社会の政治的自由の回復の過程にある時期に、民族的シヨヴィニズムの声がこのように大きく、無遠慮に轟きわたるということである。我々は永らく検閲によって沈黙を強いられてきたが、ある日突然、既成事実に直面させられたのであった。攻撃の目標は誰にも脅威を与えてはいない——なぜなら彼らは年金生活者の年齢の僅かな数の人々なのだから——一握りの地元のユダヤ人たちではない。政治的な脅しの道具になっているのが故人への意図返しである。ポーランドのアンティセミティズムは他の、遠大な攻撃的な目標を明らかにしている。なぜなら実際上それは、神学的に西欧のユダヤ人ディアスポラに対して向けられ、武装されているからである。ここ、ヴィスワの河畔

から——ある人たちは夢想するのである——十字軍は国際ユダヤ教との戦いへと遠征に出ることになるのである。我々が耳にする脅し、祈りの家の窓ガラスを叩く音、壁に書きなぐられたスローガン、放火、我々の古い墓地やホロコーストの年月の新しい墓に対する冒涇、これらはコンサートの前奏曲でしかない。ようやくその後で西欧を揺さぶることになる考え抜かれた挑発のための準備は万端整った。我々ポーランド・ユダヤ人は前奏曲を聴かされることになり、あなたたちがた、西欧のディアスポラのユダヤ人は、全コンサートを聴かねばならなくなるだろう。それ故私は、すでに今日、ディアスポラとその生きた利益にとって、第一回ショー世代作家国際会議が焦眉の要請となっていると主張するのである<sup>84</sup>。

一九五六年、スターリニズム時代の沈黙を破って一斉にポーランドの文壇に登場した新人作家のひとりであり、翌年に雑誌『現代』の編集部で知り合って以来の友情を保ってきたというマレク・ノヴァコフスキは『ワルシャワ生活』紙に寄せたヴォイドフスキへの追悼文<sup>85</sup>で、ヴォイドフスキは「書くことのうちに自らに最大限の要求を課してきたし、言葉に対する稀にみる強い責任感を持った作家だった。（……）彼はその後に石のような作品を残した。それはポーランド文学の中に永遠に留まることであろう」と述べ、最後を「だが、記憶の重さはボグダン・ヴォイドフスキにとって耐え難いものであった。彼の忍耐力を超えるものであった。そして起こるべきことが起こった。彼は世を去った」と結んでいる。一方、マティヴィエツキは「四年が過ぎたが、ボグダン・ヴォイドフスキの死は、友人と読者の記憶の中では、一九四四年四月二一日のあの日、その死を半世紀遅れのゲットーの子供の絶滅として広く感じ取ったときと全く同じく急激なものである。今日

に至るもなお、この死は——『絶滅』の追憶は——記憶から身をもぎ離し、胸と良心の中に、絶えず、あたかも今現在のことであるかのようになり現れるのである。鎮まることを知らないのだ。多くの人にとってボグダン・ヴォイドフスキはごく身近な人であったが、その自殺がこれほどつらい気持ちにさせるのは、個人的な絶望だけの（今日ではもはや悲哀だけかもしれないが）せいではない。（……）彼は自ら手で命を絶った——しかも我々には、彼がそれを解決とみなしていたのか、それとも、このようにして解決不可能な問題を同胞に残そうとしたのか分からない」「私には、どちらが先であったか自信がない。極端な鬱状態から昂揚状態への波を生じさせた凄まじい病が先か、それともひょっとして、彼の「絶滅」の意識が先か。この意識は、ある時には彼にヒューマニスティックな世界のための熱心な行動の義務を負わせ、別のときにはその意識がそれ自体に集中し、そこから抜け出すのは容易ではない虚無の渦を生み出していったのだ。私の考えでは、病が意識を鮮明化させる一方、意識を病に追い込んだのである」「彼の自殺は何であったのだろうか。私はこう感じている。『絶滅』から半世紀のち、傷痕が傷口を辱め、傷口が傷痕を開いてしまったのだ。（フリモ・レヴィ、パウル・ツェラン、イエジ・コシンスキ、ボグダン・ヴォイドフスキの自殺は、）地中からの叫びであり、鎮めることの出来ない血を流しているのだ」と書き付けている。

さらに、個人的な交際の中からの感想もこう付け加えている。「私は彼の眼を覚えている。その背後に微妙な、簡単には譲歩しない頑固な精神が隠されていた。しかし、その眼自体から、精神を超えて、何か鉱物質の、敵対的な存在についての記憶の中へと引き込む瞳が顔を覗かせていた。彼の眼からは、話し相手を戸惑わせ、不安を呼び覚ます

好奇心の炎が迸っていた——なぜなら、この炎の中では、無関心の闇が震えていたからである。

彼は精神的な人間であり、そのエネルギーでもって、障害を克服することに集中することが出来た。しかし、障害を乗り越えた後では、すでに自由な行動空間において、子供のようになすべを知らなかった」<sup>66</sup>と。筆者もまた『死者に投げられたパン』の翻訳上の疑問に厭わず答えてくれたヴォイドフスキを昨日のこのように記憶に留めている。「人の目を直視しながら話す普通のポーランド人とは異なる、落ち着かない目と、白く細い、女性的とも思える神経質な手が印象的であった。わたしを前にして、作品の背景を懇切丁寧に説こうという意気込みで興奮しているようにも見え、また一刻も早く逃げ帰りたいがっているようでもあった」（『死者に投げられたパン』恒文社、「訳者あとがき」より）。

#### 註

- 1 Bogdan Wojdowski, *List otwarty do pisarzy pokolenia Siostr: Masada, Jesień 1991*, Masada Fundacja Kulturalna, Warszawa 1991, p. 7.
- 2 Masada, *Jesień 1991*, Masada Fundacja Kulturalna, Warszawa 1991.
- 3 Bogdan Wojdowski, *List otwarty do pisarzy pokolenia Siostr: Masada, Jesień 1991*, Masada Fundacja Kulturalna, Warszawa 1991.
- 4 ボグダン・ヴォイドフスキの経歴については、アリナ・モリスクの Alina Molisak, *Bogdan David: Midrasz, Pismo Żydowskie*, Nr 4(12), kwiecień 1998, Stowarzyszenie Midrasz, Warszawa, p. 10 - 12 及び本人の了解を得て準備中の博士論文の資料を使

わせてもらった。

- 5 Bogdan Wojdowski, *Wakacje Hobo, Państwowy Instytut Wydawniczy, Warszawa 1962.*

- 6 Bogdan Wojdowski, *Chleb rzucony umarłym, Państwowy Instytut Wydawniczy,*

*Warszawa 1971.* 邦訳——ボグダン・ヴォイドフスキ『死者に投げられたパン』、

小原雅俊訳、恒文社 一九七六年。

- 7 *Współczesność*, nr 62/63, 1962.

- 8 長田弘『私の二十世紀書店』、中公新書、中央公論社、六四頁。

- 9 Jerzy Andrzejewski, *Wielki Tydzień. Noc, Państwowy Instytut Wydawniczy, Warszawa 1945.* 邦訳——イエジ・アンジェイエフスキ『聖週間』、吉上昭三訳（『バ

サジェルカ（女船客）』、恒文社、一九六六年）所収。この作品については次

回で紹介する。

回で紹介する。

- 10 長田弘、前掲書、六四頁。

- 11 Piotr Matywiecki, *Wojdowski między gettem a Masadą, Wpew wszelkim kolcom*

*drulow. Michrasz, Nr 4, 1998, p. 9.*

- 12 雑誌名『ミドラシユ』の意味は目次の頁で次のように説明されている。「文学

的手段——伝説や物語、たとえ話をういて律法上の問題を説明する、あるいは

学問を伝達する律法学者の聖書への注釈。「ミドラシユ」という語はこのよう

にして生まれた歴大な文献をも指す。『調べる』、研究する、分析する、また

『発表する』を意味するヘブライ語の語根から来ている」。

- 13 Piotr Matywiecki, *ibidem*, p. 9.

- 14 「（一九四二年）五月八日、ユダヤ戦闘団の総司令部がドイツ人とウクライナ

人の部隊によって包囲される。激しい戦闘が二時間続く。ドイツ人は戦闘では

掩蔽壕の攻略は成功しないと分かったとき、中に毒ガス爆弾を投げ込む。ドイ

ツ人の弾丸で命を落とさなかった者、毒ガスで死ななかった者は自殺を遂げる。

そこからの逃げ道はないこと、ドイツ人の手に生きたまま投降するという考え

が誰の胸にも浮かびずらなかったことはあきらかである。ユレク・ヴィルネ

ルはすべての戦闘員に向かって集団自殺を呼びかける。ルテク・ロートブラッ

トは母親と妹を射殺し、次いで自分を撃つ。ルトは自分に向かって七回撃った。

このようにしてまたしても残った戦闘員の八〇パーセントが死んだ。その中

にはユダヤ戦闘団の司令官、モルデハイ・アニエレヴィチも含まれる」(Marek

Edelman, *Getto walczy* (「ゲットーは戦う」)。(Udział Bundu w obronie getta

*warszawskiego*). Nakładem C.K. „Bundu”, Warszawa 1945; *Warszawskie Getto* (『

真集『ワルシャワ・ゲットー』) Wydawnictwo Interpress, Warszawa 1988.

また、同じ写真集に収録されたゲットーの塙の外側——ポーランド人側のゲ

ットー蜂起についての反応を集めた中に次のような記事が見られる。「……戦

闘は、マカベア一族の伝統が……完全に消えたのではなく、くすぶっていたこ

とを証明した。何百年、それどころか何千年もの間くすぶっていたが、何世紀

もののちシユツという音を立て、火花を散らし、ポーランド・ユダヤ人の間で

炎をあげた。彼らはいわば、何世紀もの間に我々が彼らに提供した、我々の文

化の最も重要な要素のひとつ——正義のための戦いにおけるよい意味での騎士

精神とヒロイズムの感覚という借金をそれによって返済したのであった……」

(Maria kann, *Na oczach świata: Wolność, maj*)。

- 15 Jan Radożycki, *Obrona Masady w świetle opowiadania Józefa Flawiusza i świadectw*

*archeologicznych. Masada, ibidem*, pp 99-114. 上の記事の結論として、ラドジツ

キはマサダの防衛者たちの行動について次のように述べている。「それは臆病

を証明する行為だったのだろうか、それともヒロイズムを証明する行為だった

のだろうか、それについて批評家たちはさまざまな見方をしている。ヨセフス

がエレアザルに語らせた言葉の中では、臆病であり、恥であるのは奴隷の身に

なること——とりわけわが身の上にただひとりの、真の主のみを、即ち神のみ

を認め、自殺死を自由な人間に相応しい、名誉ある行為と見なしていたシカリウス派（ゼロテ党の過激派）の目には——そうであった。エレアザルの両方の言葉から、奴隷の身になることへの恐れが彼らの決定の唯一の動機ではないことが分かる。神がその悪業の故にイスラエルを見捨て、全ユダヤ民族に絶滅の宣告を下したのではないことが何度も示されている。従って、名誉ある行為である神意に身を委ねるべきなのである。この終末論的モチーフもまた、マサダの防衛者たちの行為の評価に際しては考慮すべきである」（*ibidem*, p. 113）。

16 筆者自身、『マサダ』第二号の刊行を心待ちにしていたときの突然の計報であったし、ヴォイドフスキが「マサダ」という誌名を選んだことの意味を考え込んでいたものであった。

17 Bogdan Wojdowski, *Krzywe drogi, Państwowy Instytut Wydawniczy, Warszawa 1987*.

18 『ポロニカ ポーランド文化の現在・過去・未来』（責任編集 ポロニカ編集室／吉上昭三）創刊号 恒文社 一九九〇年八月三〇日所収。ボグダン・ヴォイドフスキ『老ドクター』、二〇四〜二五五頁。この小説はアンジェイ・ヴァイダ監督によって映画化された『コルチャック先生』のシナリオ（アグニエシユカ・ホラント）に活用されている。

19 この詩の一節はマティヴィエツキの記事に引用されたポーランド語訳からの筆者による重訳。

20 Piotr Matywiecki, *ibidem*, p. 9.

21 Primo Levi (1919 - 87). イタリアのユダヤ系作家。アウシュヴィッツの囚人。竹山博英訳『アウシュヴィッツは終わらない』（朝日新聞社）ほか邦訳がある。

エリ・ヴィーゼルは「ホロコースを描けぬ芸術 他のテーマとは全く異質な世界」と題された一九八九年八月一日『朝日新聞』夕刊の「文化」欄の「ニューヨーク・タイムズ」特約記事で、「あるアメリカ人作家は、私の友人ブリモ・レビの自殺について、うつ病の発作が原因だったと決めつけ、名精神分析

医にかかっていたら完治していたのにと、おせっかいな見解を発表した。アウシュヴィッツの黒い天使と戦い続けた偉大な作家も、ついにありきたりのノイローズ発作と片付けられてしまったわけだ」と述べている。また、それに続けて、「こういう状況になるとは本当に意外だ。生き証人である生存者はいても、彼らが体験した過去はすでに手の届かぬ所へ行ってしまった、その結果、誤りだらけの史実が大手を振って歩くようになった。専門家と称する者があふれ、無知な人間が評論家だと胸を張る。彼らはまるで犠牲者や生存者より多くを知っているような口をきき、サミュエル・ベケットが『いわく言いがたいもの』と呼んだものに名称を与え、伝えることができないことも伝えようとしている」（訳・尾島恵子）と語っている。

22 Paul Celan (1920 - 70) - ルーマニア生まれのユダヤ系オーストリア詩人。

23 Jerzy Kosiński (1933 - 91)。一九五七年からアメリカに在住。ドイツ占領下のポーランドの農村に投げ込まれたユダヤ人の子供の体験を残酷さとエロチシズムに満ちた筆致で描いた一九六五年作の『異端の鳥 (The Painted Bird)』（青木日出夫訳、角川書店、昭和四七年）や同じポーランド・テーマの一九六八年作の『異境 (Steps)』（青木日出夫訳、角川書店、一九七四年）は有名。ランガーの『ホロコーストの文学』でも論じられている。また、小原雅俊「ポーランド文学の昨日・今日」（中嶋嶺雄編『変貌する現代世界を読み解く言葉』、東京外国語大学・海外事情研究所叢書Ⅱ、一九九七年 国際書院）七七頁参照。

24 Piotr Matywiecki, *ibidem*, p. 8.

25 Alina Mołisak の博士論文からの引用。

26 注1の *List orwary do pisarzy pokolenia Shoah* 及び「連帯」のカトリック助任司祭であったユゼフ・ティシネル Józef Tischner が月刊誌 *Res Publica* (1968, nr 9) に掲載した「神の奴隷たち (*Niewolnicy Boga*)」という記事に論争を企図した記事「『神の奴隷』か契約の思想か (*Niewolnicy Boga "czy idea przymierza"*)」

- を指す (Masada, Jesien 1991)。
- 27 Bogdan Wojdowski, *Judaizm jako los: Plus*, 1993, nr 3.
- 28 Bogdan Wojdowski, *Tamta strona*, Wydawnictwo Dolnośląskie, Wrocław 1997.
- 29 Alina Molisak, *ibidem*.
- 30 小原雅俊「ポーランド文学の昨日・今日」*ibidem*, pp. 74-78、小原雅俊・松家仁共編訳『八資料集Ⅴ論争・ポーランド現代史の中の反ユダヤ主義』(東京外国語大学 海外事情研究所 1997年) 解題 第一部「ヤン・ブウォンスキの論文を巡って」(小原)・第二部「ミハウ・チフィの書評を巡って」(松家) 参照。
- 31 長田、前掲書、六三頁。
- 32 Piotr Matywiecki, *ibidem*, p. 6.
- 33 Piotr Matywiecki, *ibidem*, p. 9.
- 34 Piotr Matywiecki, *ibidem*, pp. 7-8.
- 35 *ibidem*, p. 8.
- 36 ボグダン・ヴォイドフスキ『死者に投げられたパン』六頁。
- 37 長田、前掲書、六四〜六五頁。
- 38 Bogdan Wojdowski, *List otwarty do pisarzy pokolenia Shoah*, *ibidem*, p. 7.
- 39 Piotr Matywiecki, *ibidem*, p. 8.
- 40 Henryk Grynberg, Piotr Matywiecki, *ibidem*, p. 9 から引用。Henryk Grynberg (1936-) は一九四二〜一九四四年をポーランドの隠れ家で生き延びたユダヤ系作家。戦後、ワルシャワの国立ユダヤ人劇場の俳優をしていたが、一九六七年、劇団と共にアメリカに渡り、検閲と反ユダヤ主義を理由に帰国を拒んだ。『ユダヤ戦争 (Wojna Żydowska)』ほか多くの著書がある。戦争中、ポーランド人によって殺され、塹壕に埋められた父親の遺骸を、戦後、自ら探り当て、掘り起こすまでを描いたバヴェウ・ウオジンスキ (Paweł Łoziński) 監督の衝撃的なドキュメンタリー映画『生地 (Miejsce urodzenia)』の主人公。この映画のストーリーは『遺産 (Dziedzictwo)』(Aneks, London, 1993) に収められている。
- 41 Alina Molisak, *ibidem* 246。
- 42 一九四六年七月四日、ポーランドの都市、キェルツェ (Kielce) で儀式殺人を理由に起こったユダヤ人に対するボグロム。四一人(四二人とも)が殺され、多くの負傷者を出した。この後、ほぼ一〇万人のユダヤ人がポーランドを去ったと言われる(小原雅俊・松家仁共編訳『八資料集Ⅴ論争・ポーランド現代史の中の反ユダヤ主義』、東京外国語大学 海外事情研究所 一九九七年、五頁 参照)。
- 43 一九四五年八月、クラクフのカジミェシュ (Kazimierz) で起こったボグロム。ジェシェフ (Rzeszów)、ラドム (Radom)、ミェフフ (Miechów)、フシヤヌフ (Chrzanów)、ラプカ (Rabka) などでも同じような事件が起こった。ユダヤ人殺害数は一九四五年に約三五〇例、一九四六年四月に八〇〇例と見積もられている。一九四七年にも選挙中に再び反ユダヤ主義的な雰囲気が高まり、ポーランドからのユダヤ人の出国数の増加をもたらす (Rafał Żebrowski, *Dzieje Żydów w Polsce. Kalendarium*, Żydowski Instytut Historyczny w Polsce, Warszawa 1993 にある)。
- 44 Mieczysław Moczar (1913-86)・六〇年代にポーランド統一労働者党内に登場したバルチザン派と呼ばれる派閥の領袖。強い民族主義的傾向を持ち、それはまずもって反ユダヤ主義として現れた。
- 45 「一九六八年三月八日、(三月事件の) 学生たちの暴動がポーランド統一労働者党指導部内部で衝突していた派閥によって総力戦に利用される。六〇年代半ばにはすでにこのうちのひとつが民族主義的論拠を用いて権力を掌握しようとしてニルンベルク法に基づく『ユダヤ家系調査』を自らの利益のために宣伝した。一九六八年三月二日からマス・メディアで『反シオニズム』迫害が開始される。(……) その結果、一九六八年〜一九七二年に約三万人のユダヤ人が



- 国外に去った」(Rafał Żebroński, *ibidem*)。
- 46 *Folks Szyne* (『人民の声』)。現在はポーランド・ユダヤ人社会文化協会 (Towarzystwo Społeczno-Kulturalne Żydów w Polsce) から *Słowo Żydowskie: Dos Jidisze Wort* (『ユダヤ人の言葉』) というタイトルの雑誌として出ている。
- 47 ワルシャワのユダヤ歴史研究所 (Żydowski Instytut Historyczny) を指す。
- 48 Bogdan Wojdowski, *List otwarty do pisarzy pokolenia Shoah*, *ibidem*, p. 8.
- 49 Bogdan Wojdowski, *List otwarty do pisarzy pokolenia Shoah*, *ibidem*, pp. 9 - 10.
- 50 前掲書『死者に投げられたパン』、四九七〜四九八頁。
- 51 Piotr Matywiecki, *ibidem*, pp. 8 - 9.
- 52 Alina Mołisak, *ibidem*.
- 53 Bogdan Wojdowski, *Pascha: Krzywe drogi. Państwowy Instytut Wydawniczy, Warszawa 1987*, p. 5 - 58.
- 54 Tadeusz Różewicz (1921 - )。詩作品と経歴については、米川和夫訳詩集『北の十字架 ポーランド詩集』(青土社)を参照されたい。フランシ・カフカに関わるテーマで書いた二作目の戯曲『罌』(一九七九年)の邦訳は『ポロニカ』No. 3、一九九二年、に所収されている(恒文社。訳は小原雅俊)。
- 55 アウシュヴィッツ Auschwitz はポーランドの地名オシフィエンチム Oświęcim のドイツ語名。
- 56 Tadeusz Drewnowski, *Stworzyć poezję po Oświęcimiu: Literatura*, Nr 4, 1986. ルシエヴィッチは、戦後すぐポーランドを訪れたピカンについての省察である七〇年代最初の詩「僕は世にも美しい怪物を見た」の一節で「アウシュヴィッツの後詩を作る」という表現を用いている。
- 57 Tadeusz Borowski (1922 - 51), Andrzej Trzebiński (1922 - 43), Marek Edelman (1922 -), Jan Józef Szczepański (1919 - ), Tadeusz Konwicki (1926 - ), Bohdan Czeszko (1923 - 88), Miron Białoszewski (1922 - 83), Anna Świrszczyńska (1909 - 84), Stanisław Grzesiuk (1918 - 63), Hanna Krall (1937 - ), Adolf Rudnicki (1912 - 90), Kornel Filipowicz (1913 - 90), Leopold Buczkowski (1905 - 89), Zofia Nałkowska (1884 - 1954).
- 58 René Char (1907 - 88) フランスの詩人。Nelly Sachs (1891 - 1970) ユーディンの女性詩人。
- 59 Tadeusz Różewicz, *Niepokój*, 1945-1946; *Czerwona rękawiczka*, 1947-1948.
- 60 Tadeusz Borowski の短編連作のうちの『グレンヴァルトの戦い (Bitwa pod Grunwaldem)』(*Kuźnica*, Nr 49, 1946)。「祖国 (*Ojczyzna*)」を指す。
- 61 Tadeusz Drewnowski, *ibidem*.
- 62 Jacek Borkowicz, *Parę słów o Żydach i Polakach: Wstęp*, Wydanie specjalne, Warszawa 1998, p. 86.
- 63 小原「ポーランド文学の昨日・今日」、前掲書、七五頁。
- 64 Jacek Borkowicz, *ibidem*, p. 86.
- 65 それではヒトラーが定めた分類を受け入れることにならないかという新たな懸念が生じる。ユダヤ人として死んだすべての人をユダヤ人と呼ぶことが出来るか。彼らの中には自分をフランス人やドイツ人、そして……ポーランド人と見なしていた者もいたからだ。虐殺された人々の国籍のことをとどのつまり忘れてよいものだろうか。ポーランド当局にとって、彼らの中にはユダヤ人＝ポーランド市民もいたことはどうでもよいことであってはならないからだ——ボルクフスキはおよそのように、「単純化」によって生じる問題を説明している (*ibidem* p. 86)。
- 66 Caryl Ferechodnik, *Czy ja jestem mordercą? Karra*, Warszawa 1993.
- 67 前掲書、小原雅俊・松家仁共編訳『八資料集／論争・ポーランド現代史の中の反ユダヤ主義』(三九〜四〇頁参照)
- 68 Czesław Miłosz (1911 - )。ポーランドの詩人。五一年パリに亡命。五八年、ア

メリカに渡る。八〇年、ノーベル文学賞を受賞。ワルシャワ・ゲットー蜂起の直前に、ワルシャワのクラシンスキ家広場に建てられたメリー・ゴランドについての詩『カンポ・デイ・フィオーリ』(Campo di Fiori)『占領下、ゲットーに閉じこめられたユダヤ人の運命に対するポーランド人の無関心の象徴としてよく引用される。小原雅俊・松家仁共編訳『八資料集』論争・ポーランド現代史の中の反ユダヤ主義』、第一部 ヤン・ブウォンスキ『哀れなポーランド人がゲットーを見つめている』参照。

69 Stefan Kisielewski (1911-91)。作家、著述家。戦後、カトリック系反対派として反マルクス主義的な風刺時評を書き続けた。

70 Melchior Wańkowicz (1892-1974)。一九三九〜五八年、国外に居住。第二次大戦中ののポーランド人の戦いを題材とした小説で有名になった。

71 Jan Józef Szczepański, *Bury*, 1946. ヤン・ブウォンスキは上述の論文『哀れなポーランド人がゲットーを見つめている』の原注の中で次のように述べている。「犠牲者にとって自分が被害者になっただけでなく、圧制者によって辱められ汚されたこと、非人間的なものに耐えることができなかったという事実を受け入れるのは容易でない。一九四四〜四八年には（それどころかその後）ポーランドの世論は社会の大きな部分の規範と道徳的荒廃を認めようとしなかった。ポロフスキやルジェヴィチのような作家たちの激烈さは読者の憤慨を呼び起こした。『ライゴドニク・ポフシェフヌイ』誌に掲載されたヤン・シュチェパンスキの短編『靴』は地下活動の兵士たちを中傷するものだという作家を非難する手紙の洪水をもたらした。

72 Miron Białoszewski, *Pamiętnik z Powstania Warszawskiego*, Państwowy Instytut Wydawniczy, Warszawa 1970.

73 ローレンス・ランガー『ホロコーストの文学』、増谷外世嗣、石田忠、井上義夫、小川雅魚訳、晶文社、一九八二年。

74 Tadeusz Borowski, *Prozę pośmiertna do gazu* (1946): *Pozegnanie z Marią*, Państwowy Instytut Wydawniczy, Warszawa 1948)。『皆さま、ガス室へどうぞ』の邦訳は関口時正他訳『ポーランド文学の贈りもの』(恒文社、1990)に所収されている(小原雅俊訳)。

75 ローレンス・ランガー、前掲書、一二頁。但し、一二六〜一二八頁に引用されている作品は『皆さま、ガス室へどうぞ』であるという原注は間違っている。本文に挙げてあるように『リッパ』アウシュヴィッツでは……』(U nas, w Auschwitzu ..., München 1946)。

76 ローレンス・ランガー、前掲書、一二八〜一二九頁。

77 Tadeusz Drewnowski, *Ucieczka z kamiennego świata*, Państwowy Instytut Wydawniczy, Warszawa 1972.

78 Tadeusz Borowski, *Rozmowy: Odrodzenie*, Nr 8, 19, II, 1950.

79 『民衆の生活・文化と変革主体(一九八二年歴研大会報告)』所収の小原雅俊「戦後初期ポーランド社会への一考察——文学を手がかりにして——」参照。

80 Bogdan Wojdowski, "Niewolnicy Boga" czy idea przynierza: Masada, Jesiń 1991.

81 Bogdan Wojdowski, *ibidem*, p.183.

82 Tadeusz Borowski, *Opowiadania wybrane*, Państwowy Instytut Wydawniczy, Warszawa 1971, p. 77.

83 Bogdan Wojdowski, *List otwarty do pisarzy pokolenia Shoah*, *ibidem*, pp. 13-14.

84 *ibidem*, pp. 16-17.

85 Marek Nowakowski, Bogdan Wojdowski: *Życie Warszawy*, 25.4.1994.

86 Piotr Matywiecki, *ibidem*, pp. 7-9.